

社会における「音楽」の必要性についての考察
—音楽授業の存在意義と社会活用について—

土屋 広次郎

Kojiro Tsuchiya

紀 要

フェリス女学院大学音楽学部

No.24 2024

社会における「音楽」の必要性についての考察

－音楽授業の存在意義と社会活用について－

土屋 広次郎

Kojiro Tsuchiya

はじめに

私が担当している音楽教育ゼミでは毎年「音楽の授業はなぜあるのか？」と学生に問いかけている。回答は無言のまま固まるか、「気分転換！」が大方であり、しかも音楽の授業は楽しかったという意見は例年 1/3 に留まった。勿論リサーチによって、世代によってはこの数字は変動するが、このように「音楽は好きだが音楽の授業の意義が不明」、もしくは「音楽を聴いたり、演奏したりすることは好きだが音楽の授業は（先生が）嫌いだった」というのは音楽の授業を受けてきた結果として長年疑問があった。子供の頃大多数から大人気だった音楽の授業は、勉強となり「音楽を楽しむ」目的を見失い、高校では学問としての「音学教育」に形を変えている印象が強い。教養としての音楽も必要だが、明治時代に作られた音楽取調係¹以降、多くの教育者の試行錯誤から辿り着いた現在の新学習指導要領を元に、「音楽」授業も英語学習と同様に社会にとって有益である説明努力が必要であることを実感している。

「音楽」という文字は「音を楽しむ」という意味で作られたのではなく、本来は音＝歌声、楽＝楽器を表して、仏教で謡う舞楽の意味であったが、音楽＝娯楽、癒し、趣味など、どこか嗜好品のような贅沢品であり、社会的には重要ではない位置づけにより、音楽の授業と「音楽」は単なる気分転換ゆえに重要視されていない存在になってしまった印象がある。

多くの教育者、研究者が音楽の授業、音楽大学の大切さを訴えかけているが、ここでは、小中高の授業時間が減りつつある音楽授業の存在意義と現状、教師の指導方法、生徒らへの影響を基本的次元から検証し、成人後に実生活ではどのような効果が出ているかを立証し、社会における音楽の必要性を考察する。そして、音楽を学ぶことは音楽に特化した脳を鍛えるばかりではなく、複合的に連携し合いながら脳や身体を育てているため、演奏家を目指さないことの罪悪感、才能がなければ音楽をやる意味がない、という意識に対して、音楽に触れることで無意識に取得でき

¹ 1879-1887 まで存在した西洋の音楽に追いつくために作られた文部省所属の音楽教育機関。

るメリットを提示できる方策を考察する。

まずは「歌唱」と「楽器演奏」について、運動、脳科学の見地から影響を立証し、楽典や音楽史など以外の教育の促し方についても検証する。実生活で音楽を学ぶ影響はどのようなシチュエーションで発揮されるかを日常の視点で考察する。更に「音の聴こえ方」に触れ、スピーカー音と生音の違いは、20 万年生きている人類にとってどういった影響があるのか、心地の良い音とは何かなど、エビデンスを基に考察し、これらの検証を経て一般社会において音楽が社会で必要とされる授業方策を考察する。

1. 音楽の授業は何のためにあるか

文部科学省が公開している中学校学習指導要領「生きる力」音楽授業目標は、

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。
- (2) 音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。
- (3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う。

と示していて、これらを表現と鑑賞の2本柱で実践していくことになる（文部科学省 2017）。

そして高校音楽の目標は以下である（文部科学省 2018）。

音楽の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。
- (2) 自己のイメージをもって音楽表現を創意工夫することや、音楽を評価しながらよさや美しさを自ら味わって聴くことができるようにする。
- (3) 主体的・協働的に音楽の幅広い活動に取り組み、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、音楽文化に親しみ、音楽によって生活や社会を明るく豊かなものにしていく態度を養う。

つまり簡単に纏めると、中学では音楽の基礎を学び、高校で更に実践し、音楽の真髄に迫ろう、という流れである。だが中学では上記の高校学習指導要領をカバーできる授業は容易に行うことが可能なため、高校で3年間授業がある学校はごく稀であり、受講する生徒も高校では選択授業から外すことに繋がってくる。だが、本当に中学3年間でこの目標は達成されるのであろうか。現在、中学3年間の音楽授業時間数は115時間で美術と同数。因みに国、数、理は385時間。保健体育は315時間、外国語は420時間もある。昭和44年の中学3年間の音楽授業は175時間（国語は525時間！）、昭和52年でも175時間。平成を境に減少し、平成10年で現行の115時間になった（国立教育政策研究所 2005）。高校になると1単位時間50分で、35単位時間の授業を1単位として、標準単位数は2単位となって世界史Aと同数であるが、殆どの高校は音楽Iで終わるか、選択で音楽を選ばなくても良い学校もあることから、音楽の授業は中学で終わってしまっているのが現状である。だが、日数にすると115時間はたった数日分しかなく、しかも殆ど中学で学習を終えてしまう。体育時間数は音楽よりは多いが、どの種目のスポーツでも極めるには時間が少なすぎるため、音楽同様に導入部で終わってしまうため体育も「体験」で終わる。そうなるこれら実技がある科目は幼少期から習い始めている生徒は有利となるため、実技習得者と未経験者とでは上記の学習目標に対して大きな格差が生じることになり、こういった構図のまま授業が行われて数十年が過ぎている。明治維新以降、音楽取調係は国民に西洋の音楽をゼロから紹介し、今やベートーヴェンを知らない日本人はいないくらい音楽の知識は広まったが、音楽教員の努力に反して、変化のない指導内容から音楽授業の存在が疑問視されるようになり、じわじわ授業時間数が減少している一因となったのではないか。中学高校の音楽授業は「学習」の実感が得られたか、私のゼミ生など大学生に聞くと大半が「音楽は日々の生活に無くてはならないものだ

が、生活に役立つものかという点と良く分からない」という回答が多く、音楽授業の存在理由は学生にとっては不透明であったことがわかる。

だが、小学校は令和2年度から、中学は令和3年度、高校は令和4年度から学習指導要領が新しくなり「生きる力」として内容を掲げていることから、これまでと違う新たな考えで音楽の授業を体験し、創造できる力を身につけた新たな生徒は、音楽授業の存在意義を実感できると期待している。のちに述べるが、音楽授業は単なる娯楽ではなく、身体、脳に絶大な影響を及ぼすことから、全ての授業学習にとって必要不可欠の科目である。前出の新学習指導要領の教科の目標には以下の文言がある。

生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することは、生徒がその後の人生において、音や音楽、音楽文化と主体的に関わり、心豊かな生活を営むことにつながる…（文部科学省 2017）。

「心豊かな生活」という曖昧な定義では学習の意図が見えにくく、この改訂については一般社会へはもとより、生徒に授業の目的と効果の詳細説明が必要ではないかと感じる。音楽の授業で触れる「音楽」で心が豊かになるという暗黙の了解は楽曲によっては雑音としか受け入れられない。未曾有のコロナ禍によりあらゆる価値観が変化してしまい、音楽の授業の意義を改めて「分かり易く」伝える必要がある。あくまで教員の指導力にかかっていることは言うまでもない。

2. 「演奏」はどういう効果があるのか

ではどういった説明が必要なのか。ここではまず演奏を学ぶことの効果について、主に脳科学の見地から述べる。fMRI（Functional Magnetic Resonance Imaging）や PET（Positron Emission Tomography）などスキャン装置の発達により、脳神経学はここ十数年、飛躍的解明が進み、未だ解明されていない多くの事項について多くの研究者によって研究されている。演奏家、教育者である私もだが、これまでは「音楽は心と体に良い」という「何となく感」で認識されていた効果に対して裏付けがされて来ている。

ピアニストは一般の人より小脳の細胞が約 50 億多く（古屋 2012: 12）、ピアニストに限らず専門的音楽訓練を受けてきた人と、そうでない人の「海馬（脳の中の部位）」の一部分の大きさが違い、暗譜演奏をすることから演奏家は大きくなり記憶を蓄える力が優れ、視覚野の神経細胞を活用して音を画像化して覚え、記憶力を実現している（古屋 2012: 98）。このように脳科学の視点か

ら音楽の効果を分析している文献や論文が多く発表されているので、ここでは学習指導要領の視点とは違った角度から、授業時の演奏による効果について取り上げる。

2-1. 歌唱

歌唱の効果は「ストレス発散」など即答されやすいが、実際には運動皮質、前頭前皮質など、大脳、小脳へ刺激を与え、体へ大きな効果をあげていることをここにまとめる。

図1：中枢神経の構成（看護 roo!HP 2023a）

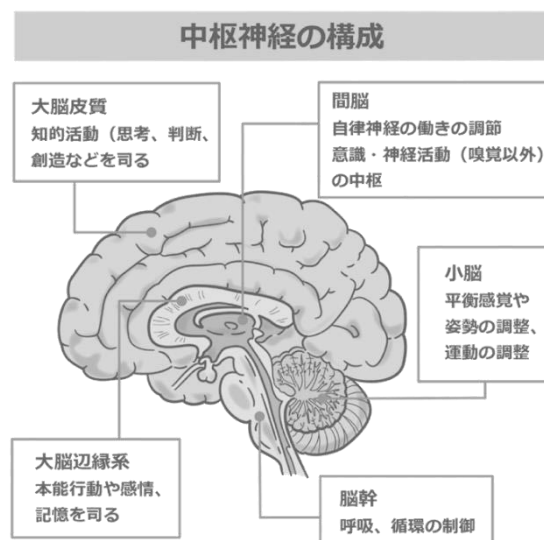


図1のように脳の様々な中枢は、刺激を受けた後、役割分担してあらゆる作業司令を送っているが、まず歌唱では姿勢保持を意識すると身体中の血流は上がるだけではなく、体の平衡や筋肉反応の調整を司る小脳が働き、基本的な身体機能の中枢を担う脳幹と連携をとりながら姿勢を維持することができるようになる。この脳幹については後ほど述べるが、但しこの「意識」は「気をつけ」ではなく、肩などの脱力がされている歌唱の基本姿勢であり、無理なくストレスにはならないよう注意が必要であるが、脳への効果はあまり知られておらず、姿勢や所作によるノンバーバルコミュニケーション力²の向上はこれからの実社会において重要なツールとなる。次に歌唱内容に準じた表情は、これもノンバーバルの必要な要素である。顎を少し前に出し、横に引っ張っただけで表情だけでなく印象の悪い声となり、曲想から逸脱する「歌わなきゃ」と言う思考は、こうした様々な不自然な表情と声を生むことになる。歌詞の大意を捉え、声だけではなく内面とと

² 言語を使わずに、表情や所作などで言語以外の方法でコミュニケーションを取る方法

もに表現しようとするれば自ずと歌唱表現力がつく。このことは大意を捉える力、つまり物事の内容をシンプルに捉える力に繋がることから、国語力向上と対応力にも通じることとなる。そして器楽演奏も同様だが、内容に沿った表現を心がけることは、要求に対して「本質を見抜く論理力」にも通じることになる。

呼吸訓練による効果は、セロトニンが整い、脳内物質の活性、血行改善にも繋がることから心のケアにもなる。日常では横隔膜は意識されにくいので、呼吸法は難解である印象となってしまうが、吸うことではなく、吐くことに留意してしっかり息を吐くことにより、腹直筋が緊張をして、限界近くまで息を吐き、お腹の力を抜けば自然と息は肺に入ってくるので、この時に横隔膜は意識されることを指導すれば容易に理解される。理屈抜きで自分の体を感じる、知ることは授業時間の少し時間に、瞑想も体験することになり心は落ち着き、冷え性の人はたった一回のこの運動でも血行が促進され耳、顔、手が温かくなることも実感できる。

そしてコミュニケーションにおいて重要なパラランゲージ³も学べる。筆者は声楽家でもあるため、ある意味会話と歌唱は同様であると考えており、音の高低、大小、速度、間、これらは全て楽譜に記載されていることであり、歌唱だけでなく発話時の共鳴箇所（胸声、頭声、口腔、咽頭）も会話時に意識が重要であることから社会で活用できるスキルとなる。更に「声質」は個性となるが、受け手に曲解されかねない重要なスキルとなる。話し手に対してもニュアンスを汲み取る力がつき、これは「脳梁」が発達することにも繋がる。そして、私たちの声は脳に入り込んだ時、人間が進化を遂げて得られた知的領域の新皮質だけでなく、脳の深いところにある本能領域の旧皮質を刺激する。つまり旧皮質に入ったときに「心地良い、悪い、好き、嫌い」といった本能的な感情を起こさせる（山崎 :218 23）。

枚挙にいとまがないが、他の教科授業ではこれらは指導されないのが殆どであり、特にEQ⁴に重点を置いた社会生活の場面では、自らの声をコントロールしながら自己表現の方法を学ぶことは重要なツールとなる。つまり、自分の声質を認識し、認め、自信を持って発話、発声を行うことは自己肯定感にも繋がる。さらにコロナ禍によるコミュニケーション不足を被った学生世代は喫緊に修得すべきことである。だが強要することではなく、生徒の自主性と個々のレベルに合わせる事が最も重要であることは言うまでもない。

³ 話し手から発せられる言語情報以外の、強弱、高低、イントネーションなどの意。パラ言語。

⁴ Emotional Intelligence Quotient の略称。「心の知能指数」といわれ、周囲の感情を察知して対人能力を良好にできる能力。

2-2. 器楽演奏

授業での器楽演奏は人数、時間の関係で合奏を多くの学校が実行している。音楽室の机に全員分のキーボードが備え付けてある学校はごく僅かであり、多くの楽器を所蔵していない学校は合奏すら十分にできない。和楽器を例に挙げると、和太鼓や三味線などの和楽器は必修の指導内容となったが、高額なこの楽器を所有している学校は稀であり、プロアーチストが訪問して模範演奏を聴くことと、代表者が演奏体験することのみで終わるのが現状である。

だが、楽器の演奏には歌唱同様に脳に良い影響がある。演奏をする際は、左脳の言語的、数学的な思考をし、右脳は創造的な思考が求められることから、脳梁左右の脳の橋渡しをすることにより強化され活性化し、多様な情報伝達ルートに対応できるようになる。つまり創造的、効果的問題解決能力がついてくることになる。マサチューセッツ工科大学（MIT）やハーバード大学など、アメリカの主要大学にて音楽を学ぶ（学べる）理由となり、関係のない分野のようだが音楽は人間育成の根幹となっていることは、アメリカでは既に知られている。

ピアノを早くから訓練していた人は、両手の指を使うので、脳と手を繋ぐ「^{すいたいろ}錘体路」という神経が発達し、左右の脳を繋ぐ神経束の脳梁も、ピアノを演奏したことがない人に比べて肥大している（ヴァイオリンなどの楽器に関しては未確認）。つまり脳全体の機能がスムーズになるので学力だけでなく運動においても影響を及ぼすことになる。

ただクラスにはピアノが演奏できない学生の方が大半であり、授業中の器楽演奏は制約された時間内での「合奏」となるので、ピアノなど特別訓練を必要とする楽器の練習をすることは困難である。よって、ある程度マスターできる楽器や奏法での練習は生徒の自主練習に任せることになるが、放課後などの時間で、学業以外でも多忙な中、果たして練習に充てる生徒が現実的に何人いるか。そうなると、クラス内で高度な楽器演奏スキルを持つ生徒と、音楽未経験な生徒が簡易な楽器で一つの曲を合奏することにより、前出の学習指導要領にある「音楽活動の楽しさを味わう」に繋がるが、これを目的とするだけではタンバリン、鈴などの簡単な楽器演奏となり、小学生の授業内容と大差なくなってしまう。

そこで合奏の主な効果は、楽曲演奏が目的は勿論だが、学習指導要領の「音楽表現の創意工夫」を達成するために、「コミュニケーション能力」向上と「ディスカッション（意見交換）」実践に着眼して指導を行うと授業の意義が見出しやすいと考える。

合奏によるコミュニケーションは、勿論クラスメイトとの協調や協働を目的として、前出の歌唱の効果にもあるノンバーバル、パラランゲージを生徒同士が駆使しつつ授業で実践していくのだが、ファシリテータである教師とのコミュニケーションが取れていないと円滑には進まない。

では教師の指導はどうあるべきか？教師は特別な演奏技術のない生徒に対しては、些細な成功や才能も見逃さず伝え、音楽専門家である教師から指摘されたことを自信として(プラーシーボ効果)獲得させ、能動的効果が生じ、生徒の合奏への取り組みが生き生きと変化を遂げる。とても基本的であり稚拙な意見に捉えられるだろうが、ここに音楽授業のあり方の重要な鍵がある。どの教科もだが(塾でも)「教師の人間性をきっかけに好きになって行く教科」は感性、情動が重要な音楽では特に重要である。そこでプラーシーボ効果を達成させるには、教師の音楽演奏力、知識、創作力、指導力、会話力など多数のスキルがバランス良く、そしてひとつでも専門分野スキルが突出している必要があり、それに加えてコミュニケーション力が最も重要となる。つまり、あまりに当たり前のことだが、教師の威圧的指導、自信の無い指導などにより、生徒から信頼されない教員であってはならないことを強く意識しなくてはならない。この後にも述べることに繋がるが、教えるだけでなく、マクロでも才能を引き出すのも教師の役目である。

だが現実ではこれだけの内容を完全マスターできる教員は(どの教科もだが)少ない。そこで今学の授業の根幹目標を「コミュニケーションスキルを上げる」こととし、併せてこのスキルを活かす「ディスカッションスキル」向上を目標とすること「も」提案してみる。

合奏によるディスカッションは時間を要さないで、簡潔にお互いの意見を言い合うことを念頭に、以下のテーマを例にあげる。

- ・サブタイトルを決める
→曲想などの方向性は曲名のみでは把握しにくい。単語か一文でまとめる。
- ・テンポを決める
→ただ設定するだけでなく、理由付けできるように。
- ・楽曲を映画のテーマにした時どういったストーリーが想像できるか？
→具体的な情景描写を「想像」して全体の方向性を決める

ということ、ブレインストーミングを条件に話し合う。こういった「話し合い」は既に多くの授業でも行われているが、3～5名程度の少人数でファシリテータを指名しつつ5分程度で決め、意見出し合い、最終決定まで10～15分程度に設定して「授業テンポ」が停滞しないように実行する注意が必要である。

そして、合奏になると演奏者同士は目でアイコンタクトを送りつつ演奏をするが、これだけでなく、如何にして与えられた楽曲を完成させるか等のディスカッションと演奏を「ワイワイ楽し

く」すると、皆の脳活動が同期を起こす「脳活動の同期」という状態になる。合奏メンバーの脳は前出のピアニストのように脳梁が肥大していない生徒ばかりであることも想定して、クラス内の演奏スキルがバランスを取れていない場合は(勿論バランスが良ければこういった問題はない)、演奏に傾倒しすぎず「コミュニケーション」「ディスカッション」にも重点をおいて器楽演奏の授業を行えば、効果が見えやすくなる。そしてコミュニケーションをとりつつ音を奏でているので、前頭前野も活発化しているといえる。

このように歌唱(合唱)、器楽演奏指導の際には、演奏時や練習時に、脳内では多くの刺激が行われていることから(花火が上がっていると表現する学者もいる)、自主的に表現、コミュニケーション、ディスカッションできる環境づくりも必要となる。例えば音楽室は縦長で、ピアノは前方黒板前で、机と椅子は一般教室と同様の配置ではパフォーマンスは困難である。最近折りたたみ椅子に付属の机で、ピアノを囲むような配置にしている学校も見受けられるので、一般教室同様の配置は回避しないと後方からの歌唱は聴こえず、縦に十数人並んで歌唱するのは軍国主義の名残ではないか?と思えるほど異様に感じる。そして集団や狭い部屋での大音量に苦痛を感じたり、発話に障害を持っていたりしている生徒に対しての把握、気づきも忘れてはならない。

教師は楽しさ、容易さに続いて努力の後に結果が示されるよう課題を課すことを忘れてはならない。スタンフォード大学教授・心理学者のキャロル・ドゥエック(Carol S.Dweck)は以下のように述べている。「以前の多くの教育者たちは、(指導)水準を下げれば生徒たちに成功体験が与えられ、自尊心を高め、成果を上げると主張してきたが、水準を下げると生徒たちはあまり教育を受けずに終わり、簡単な課題でも大げさに褒められるとってしまう・・・これは長続きせず、子供たちはやがて褒められる前の元の考え方に戻ってしまう。成長させる唯一の方法は、努力志向の褒め言葉を常に繰り返すことだ(サイド 2022: 150, 153)。」そして更に、「能力を褒めると生徒の知能が下がり、努力を褒めると生徒の知能が上がったことになる。」「優れた教師は、知力や才能は伸ばせると信じており、学ぶプロセスを大切にする(ドゥエック 2016: 95, 284)。」これらを実行することで自主的に学び、歌唱、演奏共に「愛好」できるようになり、継続することで脳内環境も整い、実社会に出ても更に演奏を続け、スキルも更に上がっていく。そんな成人を多く輩出できているはずである。

だが、調査をしてみると驚く現実の結果が見えた。青少年研究会の調査「若者の生活と意識に関する調査(令和4年/16歳から29歳全国2,400人)」で「あなたはどのような趣味をお待ちですか?」の問いに対してダントツだったのは音楽鑑賞で65.9%(複数回答)であるが(青少年研究会 2023)、文化庁が令和5年3月に発表している「文化に関する世論調査(対象:18歳以上の日

本国籍 3,000 人/20 代～60 代約十数%、70 代以上約 27%)」における鑑賞以外の文化芸術活動（発表会など）や、ボランティアで活動支援をした人は 13%しかいないという結果（文化庁 2023）は、学生時代の長年に渡る音楽教育の後、趣味から演奏家も含めた「演奏」をしている人は僅かであることは、演奏については継続的に「愛好」されていないということになり、多くの人は、演奏体験は授業時間内の体験のみで終わっている。

3. 作曲の効果

創造することの楽しさ、素晴らしさを知ってもらうために、作曲は音楽の授業のもう一つの柱となっているが、実際には殆どの学校は授業で十分に指導されていないのが現状である。美術の自由な作品制作よりも様式の制約（コード進行など）があるからか？本質を捉えながら正解のない問題に取り組み、ゼロから創造できる実践体験であるが、演奏実技系が専門の教員が多いことなどの理由で実行されていないことが多い残念な現状は、今の時代を「生きる力」として打破されるべきである。「専門ではないから出来ない」というのは本当であろうか？実は私も自信がない一人であるが、脳科学の見地から考えると初歩的内容はカバーできるはずである。

顕在記憶からなる「知識」と、潜在記憶（手続き記憶）からなる「身体」で覚えるスポーツなどは、学習方法を使い分けながら物事を学習しており、音楽においても同様で、作曲家は両方の学習方法を行うことで、音楽に関する様々な記憶を持って、その知識が作曲に応用されている。そして潜在記憶は、音をイメージし、聴いただけで楽譜に書く事ができる能力「手続き記憶」と、以前の事柄が、後の事柄に影響与える記憶「プライミング記憶」に分けられている（大黒 2022: 107-111）。つまり、何となく聴いている音楽や聴き流して聴いている CM などから音楽のパターンが記憶され、旋律や和音も「何となく」作れてしまうことになる。だが、どうしても様式に沿うよう正解求める思考が邪魔をして、自信を持って自由な発想まで到達できなくなる結果が多くみられる。「正解のない問題に取り組む」ことが作曲作業の重要な根幹なので、指導者は作品に対して許容できる知識、柔軟性が求められることになる。

作曲家でもある MIT 音楽学科長（当時）に、MIT の多くの学生は、何故作曲クラスを履修しているのか尋ねたコメントから、音楽授業で作曲を学ぶことの鍵がわかる。

多くのエンジニアが、創造的な問題解決者となるには、アートや人文学での経験が必要であることを認識していると思います。それに、テクノロジーや科学的発達が直面している問題の多くは、人間性への理解や関心の欠如など、エンジニア以外の領域で

起きていることが関わっています・・・その重要性は高まっています。(菅野 2020:

44)

つまり授業でも大切なことは、作品のクオリティ追求だけではなく、創造しようとする事へのプロセスである。そして生徒が批評を恐れずに生み出そうとする勇気を教員は促すことが最も重要な鍵となる。昨今ビジネス界ではアート思考がよく取り上げられるが、13歳、つまり中学1年生を境に、最も人気のない科目が美術になってしまうことが、アート思考を妨げていることになり、ことから(末永 2020: 8)、教員は「正解のない世界」に対して果敢に挑む一歩にもなることを告げ、見守り続けられれば自信と創造に繋がる。

4. 鑑賞の影響

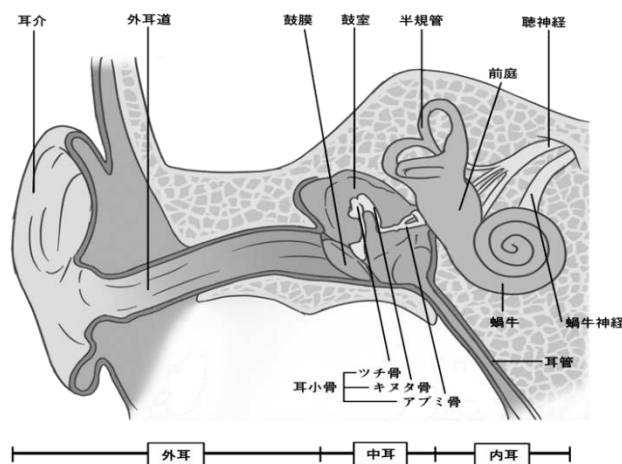
「鑑賞」とは本来、芸術作品を見たり聴いたりしてその良さを味わう意味と、受動的ではない、能動的に表現に対して評価をするという意味合いもある。昔は感想文のみだったが、表現内容、方法についてディスカッションをする傾向が最近では多く見られる。

まずは曲を音楽室等の音響機器にて試聴することになるが、学習指導要領を要約すると「名曲を知る」「時代による様式を知る」などの実行のため、クラシック楽曲については格好の睡眠時間にならないよう、事前の指導が重要であることは至極当然である。だが、中学での楽曲試聴後に、どれだけの高校生がクラシックを日常聴いているのか？学習指導要領に「愛好」の文言が記載されてから、未だに音楽の愛好を目的とした鑑賞の授業であるが、一時的な愛好なのか、永遠の愛好なのか、強制は不可能ゆえにこの目的が今ひとつ曖昧な指導になりやすいので、数十年定着していない。

中学生以降に定着して愛好されている楽曲について以下の統計がある。『日本の学校(JS コーポレーション)』が発表している2022年に調査した「好きな音楽のジャンル」では高校生男女とも1位 J-POP が約7割で、K-POP、アニソンに続いて約1割のみがクラシックを聴いているとのこと(複数回答)(JS コーポレーション 2024)。クラシック楽曲は音楽の基礎を学ぶ上では重要であるが、なぜ大半の学生は日常であまり聴いていないか？様々な日常で触れない理由は考えられるが(嫌いだから、眠くなるから等)、ここでは別の角度として「聴こえ方」について検証する。

4-1. 音が聴こえる構造

図2：耳の構造（看護 roo!HP 2023b）



まず、私たちは音をどうやって聴いているのか（ここでは「聞こえ」ではなく「聴こえ」前提で進める）。まず伝音系である外耳道から音の振動が入り、「鼓膜」を振動させ、次に「耳小骨（ツチ骨、キヌタ骨、アブミ骨、）」を振動させ、ステレオアンプのように増幅させて「蝸牛」へと送られる。この蝸牛はカタツムリの形をしていることはよく知られているが、入り口は高い周波数の音に反応し、奥の方は低い周波数の音に反応する構造で、まるでピアノの鍵盤のようにそれぞれの音に反応する場所がある。つまりたくさんの神経は音（音程）を聴いた時にこの蝸牛は同じ音に反応して次のセクションに伝えるのである。伝わった音の振動は、「有毛細胞」という細胞で振動から電気信号に変換され、次のセクションである脳の各場所へと伝わる。まず「脳幹」へ送られ、次に「視床」へと渡り、音の高さや音色、メロディーの判別を行う「聴覚野」に送られる。音楽家は、この神経細胞の数が多く、働きが優れているので音の様々な特徴の正確な処理や、音の表情を聞き分けることができる。ただし、成人後のトレーニングをした場合でも短期間のトレーニングでこの細胞を育てることが可能である（古屋 2012: 63,72）。ハーモニーの反応する場合は、言語の文法も処理をする上でもある前頭葉にある「ブローカ野」が関与している。そして左半球（右半球にはない）にある「ウェルニッケ野」と言う部分では歌の言葉を理解している。更に、リズムには聴覚野に加えて、身体の動きを司る脳部位「運動前野、大脳基底核、小脳」も関与している（古屋 2012:76）。というように脳全体で音楽を「聴いている」ことになる。先に述べた脳幹は、聴こえてきた音に似た電気活動を示すため、これらが似ているほど脳幹は正しく音の

情報処理をしている。そしてこの部位が発達していると、相手の話す言葉のニュアンスの変化を正確に汲み取ることができる（古屋 2012: 80）。つまりコミュニケーション力が上がることになり、このことは音楽家がよく使用する言葉「耳がいい」ということであり、外国語習得に適したスキルが身に付くことにもなる。といことは、音楽家に限らず、授業、練習、レッスンなど音楽に「長期間」触れることによって、自己の演奏や他者の演奏を聴いた際の僅かな音色、音程、表現の差に気が付く「耳」が育つことになるのである。

4-2. 「どこ」で聴いているのか

「音楽を聴く」ことは、脳全体で聴いていることを述べたが、ただ聴くだけではなく「感動」や「印象」を伴う、感動はどここの部位で聴いているのか？「心に響く」という言葉があるくらいなので勿論「脳」で聴くことになる。この部位は2箇所になり「尾状核」は、知っている曲を聴いた時「そうそう！キター〜！」と感動に反応してドーパミンを出し、「側坐核」は初めて聴く曲など「うわ！感動！」によってドーパミンを出している。この側坐核は活発になると痛みを和らげる働きもあるが、達成感を感じると活発になる、所謂「やる気スイッチ」でもある。（勿論魔法のスイッチであったら誰受験に苦勞はしないのだが、この部位はコツコツ目標を達成することで元気になる。）よって心で聴くことに繋がる。そして楽しいと感じる音楽を聴いた時は、心拍数は勿論上がるが、ドラッグを使用した時（使用したことはないが）活発化される領域と同じであり、プロラクチン⁵やオキシトシン⁶の神経物質も放出される（マネス 2012: 73）。

そして、耳以外で聴こえている、聴いているアーティストがいる。パーカッショニストのエヴェリン・グレニー(Evelyn Glennie)は12歳の時から次第に聴力を失ったが、1この頃にパーカッションに出会い、裸足になり、足から伝わる振動でリズムだけでなく、音の高程を感じとりながら演奏を可能にして、現在世界的なアーティストになっている。オペラとポップスの融合歌手であるアンドレア・ボッチェリ(Andrea Bocelli)は盲目であるが、通常なら視覚で使う脳の部分を、音楽の能力を助けることが出来るようになり、こうした音楽家は平均以上の聴覚が備わっていると考えられている（マネス 2012: 127）。確かに耳をすましているときは視覚情報は入っておらず、逆の場合も同様であることから、我々の五感の感覚全てで音楽を聴いていることが言える。

エヴィン・グレニーの演奏を可能にしているのは身体共鳴であり、耳ではなく骨から聴く（感

⁵ 乳汁分泌ホルモンであり、母性を育てていく母性愛ホルモン

⁶ 視床下部から分泌されるこのホルモンが分泌されると幸福感が高まる。幸せホルモン。

じる)「骨伝導 (ボーンコンダクション)」によって音を脳に伝えている。この脅威的とも思えるような感覚は、私たちが、オーケストラ演奏やオペラ歌手の歌唱を、コンサートホールで聴く時には、音波を体と脳で僅かに「聴く」体験をして、感動へ誘われているのである。

4-3. どの音楽再生機器で聴いているか

まず、そもそも日常において各世代どれだけでも人が音楽を聴いているのか？音楽授業の結果、高校生や大学生以降で自ら進んで、ジャンルに拘る事なく音楽を聴いているのか？以下に日本レコード協会が調査した結果がある。この10年で音楽に無関心、つまり「自ら進んで音楽を聞かない」層が年齢と共に増加しているのが読み取れる。しかも無料で視聴出来る媒体を使っても、2010年から2022年にかけて次第に聴かなくなっていて、巣篭もりであったコロナ禍の時期でもどうやら自宅で音楽をじっくり聴いていたとは言えない。この年齢層はシニア層が多いのだが、10代20代で音楽の趣味趣向が決まり、一定の年齢になってくると新しいアーティスト、ジャンルに興味なくなるのは多忙が理由など、様々な要因により聴かなくなる。もちろんクラシックも。音楽授業で最もクラシック音楽を聴いていた層でもあるにもかかわらず、LINEリサーチの調査でも「クラシック音楽興味がある」の回答は10代～20代では「ない」と半々だったのだが、30代以降にあると「興味がない」の回答が6割にもなっている。理由として考えられるのは「クラシック音楽は素晴らしく、心にもいいのは知っている」「クラシック音楽は嫌い」「音楽を聴くことは嫌い」という層は、眠くなる、理解できない、という既に定着している理由が考えられ、わざわざクラシック音楽を聴かないという結果になる (LINEリサーチ 2021)。

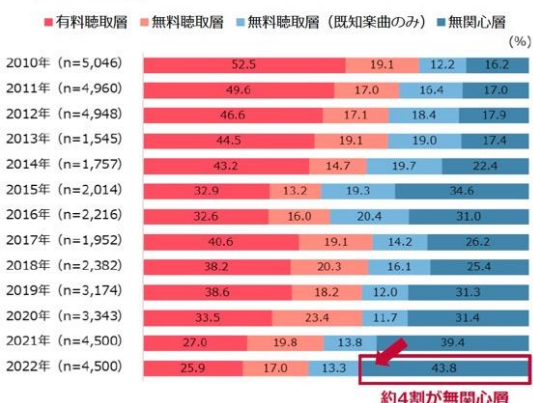
図3：音楽との関わり方 (日本レコード協会 2023: 8)

音楽との関わり方の変化 (経年変化・年代別)

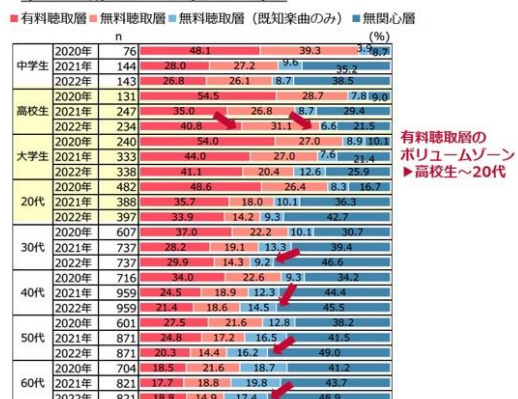
- 昨年度と比較すると、無関心層が4.4ポイント増加し、有料聴取層は1.1ポイント減少
- 有料聴取層のボリュームゾーンは高校生～20代で、特に高校生は有料聴取層と無料聴取層が増加し無関心層が減少
- 今年度は30代以上の無関心層の増加が顕著に表れている

SC2 この半年間の、あなたの音楽との関わり方について当てはまるものをひとつお選びください。(SA)

● 13年間の比較



● 年代別構成比 <2020年-2022年>



そしてどういう媒体（機器）で今は聴かれているのが多いのか？昔はレコード、少し前の時代はCDが主流であったが、デジタルオーディオプレーヤー市場は2006年をピークに縮小に転じており、2012年はピーク時の半分に落ち込んでいることからこの年に音楽再生環境に変化が起きたことがわかる（溝尻 2019: 133）。2017年に iPod 販売終了後は以下の表のように、現在では YouTube が一番視聴されている視聴方法であり、主にスマートフォンに Bluetooth で繋がれたイヤフォン（特にカナル型）で聴くことが近年多くなっている。だが、現在スマホ難聴またはイヤホン難聴の弊害が浮上している。WHO（世界保健機関）では、11億人の若者が音響性難聴のリスクがあると警笛を鳴らした理由として、85db以上（自動車の騒音程度）の音を聴く場合、大音量を聴いている時間に比例して、蝸牛にある有能細胞が傷つき破損することになり、40時間以上98dbで1週間あたり75分以上聴き続けると難聴になるとしている（厚生労働省 2009）。

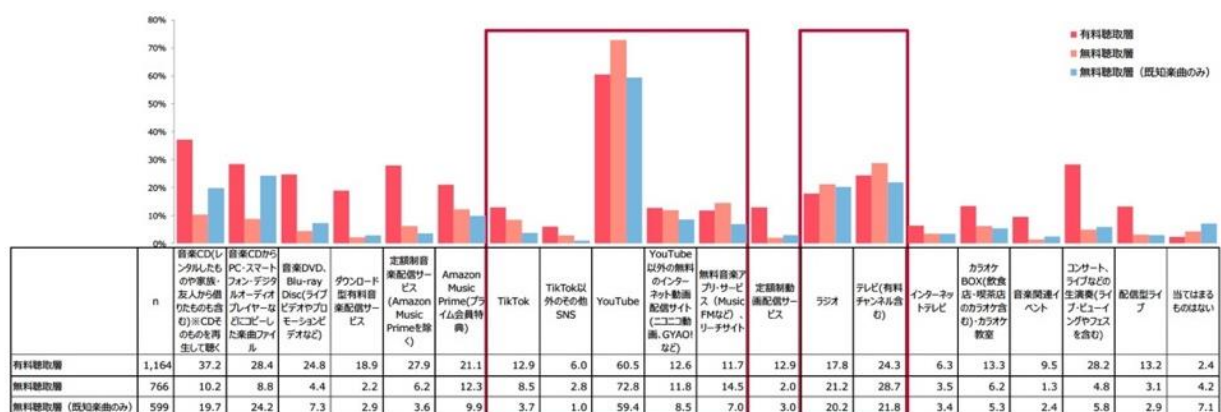
筆者は補聴器を試しに使用したことがあるが、確かに「良く聞こえる」。だが聞こえるが、この聞こえには違和感があり、「聞こえているが、聞こえてこない」つまり脳まで音声認識が都到達しない印象であった。医師や技師に質問したところ「音楽家の耳だからでは？」という回答だったので、それから聞こえ方について調べるようになった。この答えは恐らく古い脳、つまり原始から持っている大脳辺縁系の旧皮質に到達できない「いい耳」だからであると確信する。

図4：音楽の聴取方法（日本レコード協会 2023: 11）

音楽の聴取方法（音楽への関心別）

- 音楽への関心別で見ると、有料聴取層も「YouTube」「無料アプリ、リーチサイト」といった無料サービスを利用しているが、無料聴取層と比べるとやや少ない傾向がある
- 音楽に関心があるかどうかに関わらず、無料で聴くことができるサービスが使われている傾向にある

SC3 この半年間に、音楽を楽しむために利用した商品やサービスは何ですか？当てはまるものを全てお選びください。(MA) ※直近半年間、音楽視聴者ベース (SC2=1~3)



話を戻すと、ということは音の幅が強烈にあるクラシック音楽楽曲をイヤホン（ヘッドホン）で聴きつづけることは一時的でも弊害があるので、やはりスピーカーからの音源に鑑賞の授業は頼ることになるが、日本レコード協会「音楽メディアユーザー実態調査」によると「音楽を聴く時のこだわりについて」は約半数がデジタル・CDの拘りが無い（あるのは50代以上が多い）という結果であったが、音響がコンサートホール並みの音楽室のステレオセットが最高音源であれば感動的な視聴になるであろう。

だが、そもそもCDなどで聴こえてくる（クラシックに限らない）音源は、生で聴こえる配置、つまり演者が目の前で演奏する時と全く違っている。例えばライブでは無いオーケストラCD視聴時にソロパートになると、突然よくメロディが浮き上がって聴こえ、ロックも楽器が折り重なって聴こえてくる。ところが、コンサートホールでの演奏、例えばドボルザーク『新世界』第四楽章終盤でのトロンボーンとトランペットの音は、エコーのように渦巻く音の音波が響き渡る演奏効果を想定したであろうと作曲された楽曲に対して、それを再現できる高級スピーカーは大抵の音楽室には無いので、響きが広がる空間がない平坦な音を聴き、そこには情操を刺激する感覚はやってこない印象である。音の波動の違いは生音とスピーカーからでは明白であり、生成された音源には高音域の周波数がカットされており、音の伸びはなくなるため、教室の後方座席には飛んで行かない音も生じている（最近では音が伸びる高齢者用のテレビスピーカーはあるが）。反対に前方席では交響曲のような大音量になる瞬間に、「うわーカッケー」という顔をした生徒は経験上わずかであり、ほぼ騒音と捉えている印象である。

音楽の授業もICT化が急速に進み、個々のタブレット端末で視聴する授業も展開しているようだが、20万年かけて進化してきた我々人間の耳に入ってきたスピーカーやスマホからのデジタル音源は、旧皮質にまで到達しているとは言えないので、果たして音楽の授業なのか？と疑問を感じる。但し、音楽療法の見地からは、対象者によっては最適の音量で聴くことが可能であり、特定の周波数、振動パターンを強調する良い効果があるとのことなので、状況により優劣は分かれる。そして授業での視聴時に、聴覚過敏や様々な障害を抱える生徒の配慮も忘れてはならない。また、一過性のストレスでも障害は起こりうるため、大音量になる楽曲を鑑賞する場合には事前確認など準備が必要である。再三述べるが、環境によって人によって、名曲は騒音に聴こえる。

4-4. では鑑賞方法をどうすべきか

ということで音楽をスピーカーからの鑑賞時には、クラシック音楽に限定しなくても脳全体に影響を及ぼしている音の認識としては大差がないものとなる。だが、鑑賞ではなぜポップスを聴

かないのか？『クラシック音楽は、なぜ〈鑑賞〉されるのか』では興味深い意見が載せられている。

今では 今ではジャズやロック、演歌までもが教科書に載るようになっている。…楽曲そのものが変化したわけではない。年月がそれらを芸術へと変えたものでもない。要するに、関わり方の問題なのである。クラシック音楽は社会背景と共に学ばれることが前提ゆえに、ポップスなども背景と共に学ぶならば教材として認められる(西島 2010: 212)。

筆者の長年の指導経験からも、十分な説明をしたにもかかわらず長時間のクラシック音楽視聴は効果を生んでいたとは言い切れず、むしろ流行りの曲についての雑談の方が充実したクリティカルシンキングの時間となっている。つまり興味があることから、YouTube の無料視聴やサブスクはいつでもどこでも自由に楽曲を鑑賞できる利点を活かして、教室や自宅学習で作品を分析して、楽曲の本質(意味、様式)を捉える面白さを学ぶ方が近道ではないか？

様々問題点を挙げてきた。年に一回か多くて数回、体育館やホールでのプロ演奏による音楽会に学校もしくは学年やクラスで参加しているが、これでは一過性ゆえに影響があるとは言い切れない。生の音を聴く機会を継続的に提供することが最善策である。多くのハードルがあり現実的ではないのは承知だが、前出のように、ピアノや楽器、歌唱などを生で鑑賞することは多くの効果を生むことから、演奏スキルが高い教師が授業内で模範演奏をすることが最適ではないかと思う。が、演奏をすると「自慢」「自己満足」「ナルシスト」「うるさい」などのコメントが陰から聞こえることもある。音楽室のキャパや学生の趣向に合わせることも必要である。

5. 教員に求められる資質能力

情報社会ゆえに google の方が知識あると言われてきたが、とうとう生成 AI の出演により、いよいよ教師の資質がより深く問われる時代となった。だがこれは教員に限ったことではなく、すべての職種にも言えることであり、これからの人間は何を、どうやって「教える」か？ということが早急に問われる時代といなっている。

以下文科省ホームページで発表されている「教員に求められる資質能力等について」(文部科学省 2015)を参照しても、ビジネス、営業、医療どの分野にも重要な文言である。どれも当たり前

のようなことが書いてあるようにも見えるが、教職課程コアカリキュラム⁷も始まり、生徒だけでなく教員にも指導力に目が向けられるようになった。

使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力、コミュニケーション能力等がこれまでの答申等においても繰り返し提言されてきたところである。これら教員として不易の資質能力は引き続き教員に求められる・・・自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を、生涯にわたって高めていくことのできる力も必要とされる。

これ以外に「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、道徳教育の充実、ICTの活用などの新たな課題に対応できる力量を高めることが必要である」「チーム学校」の考えの下、多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力の醸成が必要である。」この答申から約7年が過ぎたが、ICTの使用スキルが身につけば上記は克服できている気がしていないか、と感じる。この答申の中でも「豊かな人間力」「コミュニケーション力」そして「積極的に各人の得意分野づくりや個性の伸長を図ることが大切であること」として教師の専門分野の研究を続け、画一的な教員を求めることはしない、とここでは述べられていることから、話し方、ノンバーバル、パラランゲージに「雑談力」も加えたコミュニケーションスキルがベースとして最も求められると考える。「えっーっと」「あの～」など枕詞をいちいち挟んでいるようでは、オンデマンド授業で倍速の方が良い、と言われてしまう。

6. 他教科への影響

音楽の授業は、他の教科にも大きな影響があることをどれだけの人が把握しているだろうか。鑑賞と音楽史は歴史と地理、身体表現は体育と生物と物理、歌唱の歌詞は英語をはじめ世界中の言語、歌詞の構成は国語等々に影響。結果的には息ぬきになる授業であるが、ただ楽曲をぼーっと聴くだけでも「デフォルトモードネットワーク⁸」となり後の授業に好影響が見込める。7時間

⁷ 文科省で検討されていた、教員免許取得に必要な教科に関する科目の内容について、共通の学習内容や構造とし、質を確保する運用。

⁸ ぼーっとして雑念に耽っている時や睡眠中に脳がおこす神経活動。

目まで授業がある学校は、休み時間のみで身体と脳が本当に休められているとは言えず、理想は（あくまで理想）毎日音楽授業があると良い学習効果が出るであろう。

脳梁をはじめ、様々な脳の領域、脳内物質、血流、心拍数など、様々な「エビデンス」をこれまで提示してきたが、音楽以外のこれだけの教科に大きな影響を及ぼしていることは、一般にどれだけの人が承知しているのだろうか？これらを実行することで、脳血流に良い影響を与えて学力向上にも繋がることは言うまでもないが、昨今ではプレゼンテーションを必修としている学校も増加しているので、話し方だけでなく、立ち方や身振りも重要なノンバーバル、パラランゲージスキルはこの音楽授業で得ることが可能となり、歌唱による声の自覚、自信は発言力スキル（声の大きさだけではない）にもなる。そして小中高で学習してきた音楽、さらに大学で専門に学んだ演奏や知識の音楽は感情の変化を感じ取ることができる「脳幹」が発達する。もしも音楽授業が無くなれば、この脳幹の発達を促すことができず、コミュニケーションが取れない人材ばかりを育成することにもなる。そして、演奏をする前に音楽（クラシックに限らずポップスも）を分析することは「本質を見抜く論理力」となり、演奏を実践することは、「結果を恐れずにやる勇気を持つ」こと、他者の演奏を聴くことは「多様性の受け入れ」ことになる。このことは昨今の多くの中学高校で最も提唱されているキーワードであり、新学習指導要領の授業内容は「表現（歌唱・器楽・創作）」では「知識」「技能」「思考力、判断力、表現力等」に、「鑑賞」では「知識」「思考力、判断力、表現力等」（文部科学省）であり、上記3つのキーワードと同意であることから、視点を変えたキーワードから、多くの科目にも影響を及ぼすことが理解できるはずである。更に付け加えると、多くの校舎を見てきたが、音楽室が天上界にあるのではなく1階、2階、職員室前などにある場合は、音楽が活発な学校が多く見受けられたことから、授業内での音楽の位置づけは校舎にも現れる。

7. 音楽の才能とは？

モーツァルトやベートーヴェンが神童と呼ばれていたが、「生まれつき」なのだろうか？
良く聞こえてくるキーワードに「音楽の才能はある、ない」があるが、本当に才能がないと音楽は演奏できないのか？または好きにならないのか？そして才能とは？

賛否両論の「10,000時間の法則」⁹というのが一時流行ったが、1日3時間を毎日やれば10年

⁹10,000時間かけて努力すればある分野のエキスパートになる、とフロリダ大学のエリクソン博士が考案した法則（エリクソン、プール 2016）。

でその道のプロになれるかといえば、私は「ある程度の」スキルは身につくと思うがやや否定的意見である。歌唱や楽器のプロに終わりがなく、スポーツ界のスーパースターは全員トップになっても練習ばかりしている。つまり学びを永遠に辞めないのが、様々なプロの共通している点である。モーツァルトは、優れた教育者でもあった父レオポルトが書いた教本で学習し、6歳には既に3,500時間の指導を受けていた。幼少期に多くの時間を費やし、そして珠玉の名曲を生み出したのは20歳以降とされていることから、天才というより努力の人であったことがわかる。それには指導者の助言がなければ習得は不可能であり、先に述べたプラシーボ効果によりポジティブ思考で「思い込み」による自信に繋げ、自ら目的を持って練習の鬼となり、失敗も成功の元と捉えることで「才能」が開花する。

初心者に限らず、「自転車に乗れる」くらい気楽で、「料理ができる」はプロ並みではなく楽しんでいる程度のように、生徒自身がスキルの優劣を問わず、マイペースで少しずつの成功で自信を積み上げ、自意識過剰にならずに演奏することができる「意識作り」が鍵となる。

おわりに 「音楽」を社会生活にどう役立てるか

社会＝ビジネスの世の中であり、サバイバルのイメージは長年拭えないので書店にはビジネス書ばかり積み上がっている。そこで目にした興味深い本に、内田和成著『右脳思考』があった。人間の思考は左脳ばかりではなく、右脳といかにバランスよく考えるかが提唱されている。そして更に、谷中修吾著『最強の縄文型ビジネス』は正に右脳型の直感力などについて触れていることから、このサバイバル時代と言われる世の中を渡っていくには「音楽力」を身につけることで、マイペース思考を巡らせ、メンタル的にも有益になると考える。

様々な立場の研究者により、音楽について様々な研究がされ、コロナ禍により「音楽は不要不急」の扱いを受けたアーティストからも多くのメッセージが世間に流布され、社会における音楽の効果について発信される量が増加傾向にあると強く感じる。そして社会に浸透するまで訴える努力はまだ必要である。前に述べたように、学校教育での音楽授業を経て、演奏を続けている人は少数であり、聴く楽曲も偏重している傾向から、これからの音楽授業は、音楽教育の必要性を「シンプルに」伝えることが急務であると考え。研究論文を一般人は見ることはなく、日常に音楽の良い効果が浸透できるようにするのは「教育機関」しかない。つまりこれからの時代を担うまだ若き層に対して解り易く、シンプルに伝える教師のスキルが必要となる。私の研究課

題でもある「エデュテインメント」¹⁰タイプで楽しい授業にしていくことに加えて「伝える力・話す力」のスキルを教師が身につける必要がある。この「伝える力・話す力」スキルは社会人として、ビジネスマンとして、IT化社会に生き残る（AIには出来ない職業に就く）ために、これから重要であることから、大学の教職必須科目に取り入れても良い内容であると考えられる。

音楽の授業は、「ただ演奏」する「楽曲知る」などという授業ではなく、明らかに社会人として身につけるスキルを学べる授業となる。つまり音楽を通じて社会を学び、しかも大学に行っても音楽を学ぶことは、プロになるためだけではなく、演奏や作曲で得た思考や技術を通じて開発された「脳」を携えつつ、自らの人生を切り開いていくことを実践しているのである。ということは音楽大学で学ぶよりも多様な分野を学ぶ大学が最適であり、演奏家か音楽教員になる「2択のみ」が大学で音楽を学ぶ大義ではないことことは言うまでもない。

女性作曲家であり、ピアニストであったテクラ・バダジェフスカ (Tekla Badarzewska, 1834-1861) はショパンの曲を演奏したい貴族やブルジョワのお嬢様ニーズに合わせて、弾き易い《乙女の祈り (Modlitwa dziewczicy)》(1851) を作曲したところ、爆発的にヒットし、この頃からピアノ演奏や音楽に触れることは、お嬢様の嗜みになっており、既に 250 年以上経ってもこの意識は変わっていないといえる。

だが、明らかに変革期が訪れてきている。演奏家が生で演奏しなくても再生音楽機器の登場により、家で聴くことが可能になり、その後は歩きながら聴き、そして YouTube の出現により無料で無尽蔵に情報が集められ、今やドイツ・グラモフォン¹¹までもがサブスクリプションで楽曲を聴き放題で提供する時代となった。つまり高額なコンサート、CD の購入によるコレクションなど、当たり前であった音楽体験が日々目まぐるしく激変してきている。異常気象、平和均衡の崩壊、コロナ禍のパンデミックから生成 AI 出現などで思い知らされた、予告困難な現代を生きる我々は、次の世代に持たせるツールとしての「音楽から得る力」は、文科省が提案した「生きる力」となり、社会生活で生きて行くため重要な力である。

そうなると授業科目名の「音楽」という名称が岐路に立たされていると感じる。紀元前中国の『呂氏春秋』に語源を持つ、この「音楽」は「音を楽しむ」と現代ではよく言われているが、ただ楽しむだけでは授業では娯楽と扱われてしまうことになり、過密な授業の有益な息抜きであるこ

¹⁰ Edutainment。Education「教育」とEntertainment「娯楽」を組み合わせた造語。「楽しみながら学ぶ」ゲーム界で良く使われる言葉。

¹¹ ドイツの世界最古のクラシック専門 (レコード) レーベル。

とも「悪」と思われてしまう所以となる。

非現実的意見だが、「音」「心」「体」などのキーワードから新語を作り、一般に知られている「音楽」の名称を変えることで、新しく音楽スキルが社会に浸透できることにつながる可能性があるかもしれない。社会に「本当の意味での音楽の重要性」を伝えるにはまだ時間が必要だが、脳科学の発達による更なるエビデンスと、驚異的な AI の発展による人間の思考の重要性が明らかになった時、社会一般に音楽の重要性が更に理解されていくと信じる。それには既存の名称、これまでの「音楽」授業や「音楽」そのもののイメージを一度払拭してみてもどうか？

日常では音楽が溢れ、音楽無しでは生きていけない、音楽は心の支え、音楽は人を繋ぐ・・・。世界の音楽産業の巨大化により、現代ではこのように音楽の重要性が謳われてきたが、曖昧な理解による情操教育だけではなく、演奏による脳内物質の充実や自己肯定感の育成に繋がるなどの目に見える効果の流布を早急に進めなければならない。だが、多様な音楽や多様な目まぐるしい人間の変化に筆者の研究はついて行けていないと実感するため、情報の偏重により、研究方向に間違いに注視するために、多くの情報や、教員やゼミの学生との多くのディスカッションを継続し、変革の時代に見合った教育が充実できる方策について、今後も更に研究を進めて行く所存である。

参考文献

内田和成著 2019『右脳思考』東洋経済新報社。

エリクソン、アンダース、ロバート・プール 2016『超一流になるのは才能か？努力か？』土方奈美訳、文藝春秋。

大黒達也 2022『音楽する脳』朝日新聞出版。

看護 roo! 2023a「中枢神経系の構成のイラスト」https://www.kango-roo.com/ki/image_2077/

———2023b「耳の断面図のイラスト」https://www.kango-roo.com/ki/image_1085/

菅野恵理子 2020『マサチューセッツ工科大学音楽の授業』あさ出版。

厚生労働省 2019「e-ヘルスネット ヘッドホン難聴について」厚生労働省 生活習慣病予防のための健康情報サイト。<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/sensory-organ/s-002.html>

国立教育政策研究所 2005「授業時数の変遷」<https://www.nier.go.jp/kiso/sisitu/siryoku1/2-02.pdf>

サイド、マシュー 2022『才能の科学』山形浩生・守岡桜訳、河出書房新社

末永幸歩 2020『13歳からのアート思考』ダイヤモンド社。

青少年研究会 2023「若者の生活と意識に関する調査」<http://jysg.jp/img/20230910.pdf>

ドゥエック、キャロル・S 2016『マインドセット』今西康子訳、草思社。

西島千尋 2010『クラシック音楽は、なぜ〈鑑賞〉されるのか』新曜社。

日本レコード協会 2023「音楽メディアユーザー実態調査 2022 年度」<https://www.riaj.or.jp/f/report/mediauser/2022.html>

古屋晋一 2012『ピアニストの脳を科学する』春秋社。

文化庁 2023「文化に関する世論調査」https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/pdf/93911701_01.pdf

マネス、エレナ 2012『音楽と人間と宇宙』柏野牧夫監修、佐々木千恵訳、ヤマハミュージックエンタテイメント。

溝尻真也 2019『音楽化社会の現在・7章 音質へのこだわりとその行方』新曜社

文部科学省 2015「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」中央教育審議会
答申、https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/fieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf

———2017「中学学習指導要領 音楽編」https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2019/03/18/1387018_006.pdf

———2018「高校学習指導要領（平成30年告示）解説 音楽編」https://www.mext.go.jp/content/1407073_08_2.pdf

谷中修吾 2019『最強の縄文型ビジネス』日本経済新聞出版。

山崎広子 2018『声のサイエンス』NHK 出版新書。

JS コーポレーション 2024「高校生ライフランキング」2024年1月1日閲覧。
<https://school.js88.com/koukousei/life/ranking/2021musicgenres>

LINE リサーチ 2021b「クラシック音楽に興味がある人は全体で5割弱、10代・20代でやや高い
傾向に 演奏できるようになりたいあこがれの楽器は全年代で「ピアノ」が1位」
<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000003306.000001594.html>